

## 水稻の病害の発生が多い状況です。 防除を徹底しましょう！

今年、「葉いもち」および「紋枯病」の発生が目立っています。今後も降水量が平年並か多いと予想されるため、「穂いもち」および「白葉枯病」の多発が懸念されます。そこで、既に発生している圃場だけでなく、まだ発生していない圃場も含めて、防除を徹底しましょう。

### 1. いもち病

#### 1) 発生状況

##### (1) 巡回調査

7月中下旬の調査では、早期水稻では2圃場で穂いもちの「少」発生を認めており、発生圃場率は平年並、発病度は平年より低かった。一方、普通期水稻では1圃場で葉いもちの「中」発生、7圃場で「少」発生を認めており、発生圃場率は平年並、発病度はやや低かった。なお、中山間地域での発生が目立っており、一部地域では葉いもちの多発情報も寄せられている。

早期水稻における穂いもち発生状況

発生圃場率 : 20.0% (平年: 16.9%、前年: 0%)

平均発病度 : 0.2 (平年: 1.2、前年: 0)

普通期水稻における葉いもち発生状況

発生圃場率 : 26.7% (平年: 30.0%、前年: 20.0%)

平均発病度 : 1.8 (平年: 2.6、前年: 2.0)

##### (2) 予察田

安全農業研究所予察田では、7月24日にヒノヒカリ、おおいた11、ひとめぼれ、ユメヒカリで初発生を認めた。7月24日現在の発病株率は、平年に比べて高く、おおいた11、ひとめぼれで前年並、ヒノヒカリ、ユメヒカリで前年に比べて高かった。平均病斑面積率は、平年に比べて高く、いずれの品種も前年並であった

発病株率

ヒノヒカリ 82.0% (平年 23.3%、前年 64.0%) おおいた11 60.0% (平年 19.7%、前年 58.0%)

ひとめぼれ 78.0% (平年 36.3%、前年 72.0%) ユメヒカリ 100.0% (平年 30.6%、前年 84.0%)

(平年値は、ヒノヒカリおよびユメヒカリは7カ年、おおいた11は3カ年、ひとめぼれは4カ年の平均)

平均病斑面積率

ヒノヒカリ 0.17% (平年 0.08%、前年 0.16%) おおいた11 0.12% (平年 0.04%、前年 0.12%)

ひとめぼれ 0.21% (平年 0.07%、前年 0.20%) ユメヒカリ 0.20% (平年 0.07%、前年 0.20%)

(平年値は、おおいた11は3カ年、ひとめぼれは4カ年の平均)

#### 2) 感染好適条件日

6月20日～7月28日におけるBLASTAMによるいもち病感染好適条件の出現状況は、6月20～22日に、佐伯1回、宇目1回、6月28～29日に佐伯1回、宇目1回、7月4～8日に、院内1回、日田1回、玖珠2回、竹田1回および宇目1回、7月26～27日に、玖珠1回、竹田1回および宇目2回出現した。

#### 3) 気象

本病は冷涼、多雨条件が発病に好適であるが、気象予報によれば向こう1か月の気温は、平年並または低い確率ともに40%であり、降水量は、平年並または多い確率ともに40%と予想されている。

#### 4) 今後の対策

- (1) 葉いもちの発生が多い場合は、直ちに防除を行い、穂肥をひかえ目に施用する。
- (2) 穂いもちの防除は、出穂約2週間前の粒剤施用と穂揃期の液剤又は粉剤散布、あるいは穂ばらみ期と穂揃期の液剤又は粉剤による2回散布を基本とする。また、出穂期を見極め、防除適期を失しないよう注意する。
- (3) 「あきまさり」など本病に弱い品種の作付けが行われている地域では、特に注意が必要である。
- (4) 穂肥の過剰投与は、本病の発病を助長させるため、注意が必要である。

## 2. 紋枯病

### 1) 巡回調査

7月中下旬の調査では、早期水稲では、1圃場で「中」発生を、4圃場で「少」発生を認めており、発生圃場率は平年より高く、発病度はやや高かった。また、普通期水稲では、3圃場で「少」発生を認めており、発生圃場率、発病度ともに平年より高かった。また、中山間地域での発生が目立った。

早期水稲における発生状況

発生圃場率 : 50.0% (平年 : 24.0%、前年 : 40.0%)

平均発病度 : 3.5 (平年 : 2.7、前年 : 2.6)

普通期水稲における発生状況

発生圃場率 : 10.0% (平年 : 1.2%、前年 : 0%)

平均発病度 : 0.3 (平年 : 0.0、前年 : 0)

### 2) 予察田

安全農業研究所予察田では、7月24日現在、ヒノヒカリ、おおいた11、ひとめぼれ、ユメヒカリとも初発生を確認していない。

### 3) 作況

本病は過繁茂な生育状況で発生が助長される。水田農業研究所の作況判定試験では、7月25日現在、莖数は、ヒノヒカリ(平年比97%)、ユメヒカリ(同91%)とも平年を下回っている。

### 4) 気象

本病は高温、多湿で発病が助長される。気象予報によれば向こう1か月の気温は、平年並または低い確率ともに40%であり、降水量は、平年並または多い確率ともに40%と予想されている。

### 5) 今後の対策

(1) 株元の高温多湿は本病の発生を助長するので、間断灌水を行うとともに適切な肥培管理に努める。

(2) 本病の発生は圃場間差が大きく、昨年多発した圃場では本年も多発することが予想されることから、早めの防除を行い、本病の水平進展を抑制することに努める。

(3) 薬剤防除の適期は、出穂1～2週間前であるので、防除を徹底する。

(4) 穂肥の過剰投与は、本病の発病を助長させるため、注意が必要である。

## 3. 白葉枯病

### 1) 巡回調査

7月中下旬の調査では、早期水稲では発生が認められなかった。また、普通期水稲では、1圃場で「少」発生を認めており、発生圃場率は平年より高く、発病度は平年並であった。

早期水稲における発生状況

発生圃場率 : 0% (平年 : 0%、前年 : 0%)

平均発病度 : 0 (平年 : 0、前年 : 0)

普通期水稲における発生状況

発生圃場率 : 3.3% (平年 : 0.5%、前年 : 0%)

平均発病度 : 0.0 (平年 : 0.0、前年 : 0)

### 2) 気象

本病は風雨とそれに伴う浸冠水により発病が助長される。気象予報によれば、降水量は、平年並または多い確率ともに40%と予想されている。特に、7月下旬の集中豪雨により浸冠水した水田が多く、常発地では今後発生圃場の増加が予想される。

### 3) 今後の対策

(1) 常習発生地では、暴風雨後は直ちに薬剤散布を行う。

(2) 昨年発生した圃場では、浸冠水により発生する可能性が高いので予防散布を行う。

(3) プロベナゾール(オリゼメート)粒剤の出穂20～30日前の施用は、本病といもち病との同時防除剤として効果が高い。

(4) 穂肥の過剰投与は、本病の発病を助長させるため、注意が必要である。

## 4. 薬剤散布に関する留意点

大分県農林水産研究センター安全農業研究所ホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照する。なお、薬剤によっては、指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、薬剤のラベルに従って使用する。

(ホームページアドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/oita/>)